

寒冷地における農家の採暖について

長谷川 宏 二

(東北農試)

1. はじめに

本報告は「寒さと生活に関する研究」の一環をなすものであり、寒さという条件に対する農家の採暖を通じての適応のメカニズムを明らかにしようとした。

調査は昭和33年2月末から3月初旬にかけて、水田単作地帯に属する岩手県盛岡市太田、榑部落（旧岩手郡太田村）及び普通畑作地帯である岩手郡滝沢村日向部落でそれぞれ10戸・12戸の農家について行った。

なお当地方の農家住宅は一般的に曲り屋が多いが、生産力の高い榑部落では脱穀調製作業の機械化に伴って、曲り屋から直屋化への変化と間取りの分化が進んでいるのに対し、日向部落では旧い形のままでの曲り屋が多く残っている。

2. 採暖様式の構造

ここでは農家がどのような採暖器具を使って一採暖を通じてどのように住生活を行っているかという意味で採暖様式を考えたい。

先ず当地で使用されている採暖器具と、その設けら

れる部屋との組合わせによるタイプを設定し、それによって採暖の仕方をみる。

両部落を通じてコタツ1つに家族全員が主として団欒を兼ねて採暖するという形が一般的であり、イロリ・ストーブは炊事・接客用として機能している。すなわちタイプによる違いは燃焼器具としての機能の分化と、その設けられる部屋の機能の分化の相違である。そしてストーブはその燃焼形式が多面的な利用に適し、部屋の機能に順応してストーブの機能が沢まるが、コタツは採暖の機能にのみ限定される所から、逆にコタツの設けられる部屋が採暖室として独立する方向をとる。

3. 採暖様式を規制する条件

1. 屋根材料と燃料資源

採暖のタイプの中ストーブとイロリの違いは、戦後の新改築に依る茅葺屋根から瓦・トタン屋根への変化が排煙を困難にし、イロリを廃止せざるを得ず、ストーブが代って導入されたことによる。しかし採暖器具がどのように使われるかは燃料の入手方法・価格により規制される。コタツが採暖の中心におかれたのは、戦後の燃料資

採暖のタイプと部屋の機能

タイプ	採暖器具	部 屋 の 名 称						採暖器具と部屋の機能	
		ジョウイ		ダイドコロ		そ の 他		榑	日 向
		榑	日 向	榑	日 向	榑	日 向		
I	コ タ ツ	0	0	2	0	0	0	家族の採暖 炊事(接客) 接客	
	ス ト ー ブ	0	0	2	0	0	0		
	ス ト ー ブ	0	0	1	0	1	0		
II	コ タ ツ	0	3	2	0	1	1	家族の採暖 炊事, 接客	家族の採暖 炊事, 接客
	ス ト ー ブ	0	0	2	3	1	1		
III	コ タ ツ	0	0	0	0	1	0	} 個人の採暖 炊事, 接客, 団欒	
	コ タ ツ	0	0	0	0	1	0		
	ス ト ー ブ	0	0	1	0	0	0		
IV	コ イ	0	5	1	0	0	0	家族の採暖, 接客 炊事	家族の採暖, 接客 炊事, 接客
	タ ロ リ	0	0	1	5	0	0		
V	コ タ ツ	0	2	0	0	0	0	} 家族の採暖, 接客 炊事, 接客	
	コ タ ツ	0	0	0	1	0	1		
	コ イ	0	0	0	2	0	2		
VI	コ タ ツ	2	0	0	0	1	1	家族の採暖, 接客	家族の採暖, 接客

源の潤滑に伴う薪価格の高騰が、イロリ・ストーブをふんだんに使うことを許さないためである。

2. 農家の性格

次に採暖のタイプが農家のどのような性格の下で成り立っているかをみれば、最も端的にはコタツだけ（タイプVI）の農家においてであろう。ここでは炊事がカマドで行われるため、ストーブ・イロリを含むタイプと違って炊事に際しても採暖が出来ない条件におかれるが、それを許している家族の人間関係は、炊事担当者たる主婦・嫁が何れも家娘で、好きな時に採暖出来るという身分的自由さを持つためである。またストーブを使用している農家の多くが兼業農家であるということは、兼業による社会的接触の広さがストーブの導入に関係するものと思われる。

特にⅢ型の農家が家の統卒者である経営主が別居している所から、個人の採暖を生じている点注意すべきである。

4. 現状における採暖様式の矛盾と将来の動向

冬期間の各家族員の生活は主婦・嫁が専ら作業場で葉

仕事に従事し、経営主・長男が外用と休息に終始するというように、家族内の地位によって違っている。そして経営主・長男がその身分的な自由さの故に好きな時コタツへ入れるのに対して、婦人は夕食後の団欒を通じてのみ採暖が可能になっている。しかも家族構成が複雑になる程、この採暖における身分的關係が強まっている。このことは広いダイドコロのイロリを中心に、家長の統卒の下に全ての生活行為が採暖と未分化に営まれていた段階での、茅葺屋根・広いダイドコロ・イロリ・農作業・家父長家族関係といった一連のバランスを保った適応の仕方からの変化の過程でより明らかにされる。すなわち住宅構造をそのままに、採暖だけが他の生活行為と切離されてコタツに固定されるという変化の仕方の不均衡さが、家父長の家族関係の残存と結びついて、前述の矛盾が行れたと考えられる。

しかしこの矛盾はまだ家族員によって明確に把握されておらず、家的イデオロギーと寒さに適応しない住宅構造の下で、コタツによる採暖に固執し、多室暖房一住生活における個人の確立（採暖も含めて）一つの芽生えが見出せない段階といえよう。

山形県高畠地区における乳牛飼料の実態について

小笠原 璋・中山 誠一郎・神 保 憲 雄

（山形県農試）

東北6県の共同研究である「飼料構造の大数調査」を素材として、本県酪農の中心地である高畠町（旧二井宿村・和田村）並びに上ノ山市（旧中川村）の2地点における飼料の生産並びに給与の構造を解析し参考に供した。当地区の酪農型は養蚕との補合関係をなす型態が圧倒的に多く、これが内容を分類すると第1表の通りであって、酪農養蚕型が最も多く、次に養蚕酪農型・酪農兼業型・酪農養蚕商品作物型・酪農専業型となっている。飼育牛は第2表の通り登録牛が多く全農家の41%に飼養

されているが、産乳量は必ずしも高くない。すなわち搾乳牛1頭当りの年間乳量は15～20石が最も多く、35.8%を占め、20～25石は25%、30石以上がわずかに6.7%で

第2表 乳牛の登録別飼育農家数

項目	登録別	登録				雑種	不詳	計
		高等	血統	普通	計			
戸数		27	7	20	54	65	11	130
比率		20.8	5.4	15.3	41.5	50.0	8.5	100

第3表 乳牛1頭当り産乳水準

項目	水準	5石以下	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30石以上	計
頭数		2	9	15	43	30	13	8	120
比率		1.7	7.5	12.5	35.8	25.0	10.8	6.7	100

第1表 酪農のタイプ

項目	タイプ	酪農養蚕型	養蚕酪農型	酪農兼業型	酪農養蚕商品作物型	酪農専業型	計
戸数		55	37	29	9	4	134
比率		40.8	28.1	21.5	6.7	2.9	100